

「神話の創造」「新しい担い手」と商店街の 活性化に向けた持続可能なまちづくり — 春日井市勝川駅前通り商店街の取り組みを事例として2010 —

Sustainable community building through
the reactivation of shopping street by means of creating a myth
— Using as a model the case of Kachigawa Shopping Street
in Kasugai city 2010—

羽 後 静 子
Seiko HANOCHI

岡 本 肇
Hajime OKAMOTO

目 次

本研究の目的と2年目報告の概要	羽後静子
報告1 勝川商店街周辺地区における「まちあるき」	岡本 肇
報告2 勝川商店街通り弘法市ひまわりプロジェクト	山羽 基
報告3 アニメ・キャラクターによる商店街の活性化の基礎的条件 — 町おこしの事例紹介を中心に —	川田 健
報告4 商店街におけるSNSネットワークとサインージ構想案	上田敦彦
コラム1 まちに“書”が溢れていない“書のまち春日井”の不思議	波多野明翠
コラム2 高齢者ITそしてNPO	今西 實
まとめ	羽後静子・岡本 肇
[資料] 2009年度研究報告パワーポイント	羽後静子・水野 隆・岡本 肇

本研究の目的と2年目報告の概要

羽後静子（中部大学国際関係学部国際関係学科准教授）

昨年度¹⁾に続き、勝川駅前通り商店街の持続発展をめざしたこれまでの諸活動を検討する。「持続可能な（多文化共生の）まちづくり」をキーワードにしている私たちの同商店街での諸活動は、地域コミュニティの崩壊が進んでいる中で、春日井市高蔵寺ニュータウンに住むフィリピン移住女性たちとの交流がはじまるなど²⁾、行政主導の計画というかたちではなしに、商店街の関係者によって進めようとしている点が注目される。このような意味で、勝川駅前通り商店街で進められている「まちづくり」の諸活動は、下記で説明するように二水会での商店街関係者と外部からこれをサポートする関係者の懇談の中から活動プロジェクトの案を出し合う自己組織化、この活動プロジェクトの実施には二水会会員が各自の関心に従って参加するという自立分散型の活動によって、自己組織系による自立分散型の地域発展の典型例ともなりうる可能性を秘めている。

1. 二水会：自立分散型の自己組織化の「まちづくり」運動を方向づけ、絶えず方向修正を敏速におこなうために、勝川駅前通り商店街の地元リーダーと商店街の外部からサポートする大学教員など約10名が、2009年春から毎月の第二水曜日夜、勝川駅前通り商店街の一角にある会議室に集まって「商店街＋サポーター会議」を開催している。第2水曜日に開催されることから二水会と名付けられているこの会合は、商店街リーダーと外部サポーターの情報交換の場、対話の場、そしてとくにヴィジョン形成の場となっている。この二水会という場の存在によって、「持続可能な（多文化共生の）まちづくり」の方向づけが行われている、
2. SNS：パソコン通信の社会ネットワークづくり、ヴァーチャル・コミュニケーションによる勝川駅前通り商店街を中心とするコミュニティづくりの方向づけを対面集団としてのリアル・コミュニティづくりの補助手段として活用していることに特に注目する。この二水会での対面コミュニケーションを補助するSNSを併用するコミュニティづくりに関して、リアルとヴァーチャルの二つのレベルでの参加型観察を進めることで、自立分散型の自己組織化における「まちづくり」の可能性、とその疎外要因について、商店街のみならずこれに外部から関係を持つ社会ネットワークを含めての調査・研究を進める。

以上の二点のうち、二水会についてくわしく説明したい。勝川駅前通り商店街の「まちづくり」はハード面ですでに進んでいるけれども、そのソフト面をどのように

整えていくべきかが問われている。商店街の店主と外から訪れる市民との協力によって、往時のような活気あるコミュニティを再生させるためにどのような工夫をこらすべきか、この大問題と取り組むために、勝川駅前通り商店街では、商店街の商店関係者と、商店街に集う市民の商店街サポーターたちが、毎月第2水曜日に集まっている話し合う二水会がすでに一年間以上続いている。

この二水会で話し合われている問題は、実は日本各地の『商店街』が経験している問題である。グローバル経済の浸透する都市空間において、伝統的なコミュニティの生活の中心になっていた『商店街』という人間関係のネットワークが解体されてしまったことの深刻な副産物である。二水会では、今日の大店が支配する都市空間の中で、どのようにしたら、『商店街』を新しい市民生活のコミュニティの中心にすることができるとのことについて、いろいろ話し合ってきた。本稿は、この話し合いで出てきた、勝川駅前通り商店街を中心とする春日井市の「まちづくり」あるいは「コミュニティづくり」の実践活動事例の報告である。それぞれが、どのようにして、「まちづくり」に貢献しようとしているかについて考えたい。そしてさらに、グローバル化経済の影響下で崩壊してしまった伝統的な「コミュニティ」空間である『商店街』という空間を、新しい都市のコミュニティづくりの中心に据えることができるかどうかについて考えてみたい。

すでに述べたように、二水会の特徴は、商店街関係者とそのサポーターたちが話し合いを続けながら、そこから自然に生まれてくるアイデアを掘り下げ、そこから自己組織系としての「まちづくり」のさまざまな側面を自然に見つけ出していこうとするところにある。本稿も、そのような自然に話題にされてきた様々な問題とそれについての対応策の提案を集めたものである。一見どのような関連性があるかわからない4つの報告と2つのコラムを見比べて、そこに隠れている関連性を見つけ出すことが本稿の狙いである。二水会でこの4つの実践が提案され、参加者によって実現に向けての努力が進められてきた。以下、二水会の議論をもとにして出てきた活動プロジェクトをここで紹介する。

報告 1

勝川駅前商店街周辺地区における「まちあるき」

岡本 肇（中部大学中部高等学術研究所研究員）

1. 「まちあるき」の目的と概要

平成22年6月18日（金）、二水会主催で勝川駅前商店街周辺地区の「まちあるき」

を行った。市民参加型まちづくりの分野では、「まちあるき」はまちづくりの担い手がまちの実情を知り、共有するための基礎的な手法である。今回の「まちあるき」は二水会にとっては初の試みであり、普段行っている定例会での議論ではなかなか出てこない視点からの意見の抽出や地域資源の再発見等を目的とし、開催された。

今回は、勝川駅前商店街とその周辺地区を一時間半かけて周り、その後グループに分かれ、それぞれのグループの中で「まちのファースト・インプレッションの抽出とこれからのあり方の提案」をまとめた。最後は各グループがまとめたものを発表し合い、意見交換を行った。参加者は筆者を含む二水会の会員7名、学生（中部大学羽後ゼミ）7人、その他（外部地域からの参加者等）4名の計18名である。

2. 「まちあるき」のルートと様子

勝川駅前通り商店街のメインストリートをはじめ、その周辺のまちづくりのキーとなるスポット（旭町地区公民館、崇彦寺、旧名鉄勝川駅周辺、勝川幼稚園（旧郡役所跡）、J R勝川駅、法岑寺、八光公園等）を、写真撮影を行いながら散策した。また散策の際、地元商店主が案内人となってキースポットの解説や参加者からの質問に対して回答を行った。



「まちあるき」の様子

当日はあいにく雨であったが、お店の方にお話を伺ったり、地元商店主でも普段歩いていただけではなかなか気がつかないような地域資源が話題になったり、終始和やかな雰囲気ですべて「まちあるき」は行われた。

3. まちのファースト・インプレッションの抽出とこれからのあり方の提案

「まちあるき」の後、旭町地区公民館にて、「まちのファースト・インプレッションの抽出とこれからのあり方の提案」を行った。

ファースト・インプレッションの抽出では、3班のグループに分かれ、それぞれのグループでまちの「いいところ」、「悪いところ」を抽出した。

「いいところ」に関しては、「雰囲気がいい・心がなごむ」、「おもかる石（崇彦寺の伝説の石）が面白かった」、「お好み焼き屋のおばあちゃんいい人でかわいい」、「駅前から道路・路地が勝手四方に広がっているのが魅力」、「人が気さく」等、懐かしさが

残る勝川独特の雰囲気や地域資源、業種・業態構成、人のあり様、に関しての意見が多く出た。

「悪いところ」に関しては、「新しい店と古い店の関係性がまずい」、「商店街のカラーの統一性がない」、「全体的に緑が少ない」、「空地・駐車場が多い」、「弘法様の横が公民館というのは少し変」等、空間・街並みに関しての意見が多く出た。



「ファースト・インプレッション」抽出の様子

これらのファースト・インプレッションから、「店舗のデザインの統一・まとまりを」、「各路地に名前を」、「崇彦寺と公民館立地場所の拠点化・一体化したデザインを」、「大きな木がほしい」、「回遊できるまちに」、といったようなまちのこれからのあり方について提案がされた。これらの提案の多くは、月一回行われている二水会の定例会では、あまり出されることがなかった内容の意見である。

4. 「まちあるき」の成果と今後の活用

今回の「まちあるき」は二水会としては初めての試みであり、参加者間でまちの実情を共有できたことは大きな成果である。出された意見は、後日、この「まちあるき」でファシリテーターを務めた筆者によってテーマ毎に体系的にまとめられ、二水会定例会での議論のたたき台として活用された。長期的には、商店主や一般市民に対してまちづくりの提案書を二水会として作成・提出する際の、根拠となる資料の一つとして活用する予定である。

また先にも記したように、「これからのあり方」に関しては、今まで二水会の定例会の中では、あまり注目されなかった視点が提示された。これは、まちを実際に見た直後に案づくりを行ったことや、今まで二水会の定例会に参加してこなかった外部地域からの参加者や学生たちの視点によるところが大きい。まちづくりは様々な立場の多様な価値のぶつかり合いの中から合意形成を行って進めていくものであり、今回の「まちあるき」で、「まちあるき」がアウトリーチ手法として有効であることも再認識された。

今後は、散策の場所、参加者の属性、季節、時間帯等を適宜替えながら、継続的に「まちあるき」を行うことで、まちの真の実情にせまり、それらを基にまちづくりの議論を実のあるものとするのが重要である。

報告 2

勝川駅前通り商店街ひまわりプロジェクト

山羽 基（中部大学工学部建築学科教授）

現代の我々の生活は多くのエネルギーに支えられて成立している。暑さ寒さをしのぎ快適な環境を作り出し、健康で安全な生活を送ることができるが、先進国では、産業革命前の農耕社会にくらべて数十倍のエネルギーを消費している。世界には1日1ドル以下で暮らし、十分な食糧や医療、安全な住居が得られない人々が先進国の人口に匹敵する数存在している。これらの人々が健康で安全に暮らせるようになると、調理、暖房、医療などに多くのエネルギーを使うようになり、この安定的な供給が必須である。

現在のエネルギー供給は、石油、石炭などの化石燃料に大部分を依存している。化石燃料の使用は、将来の枯渇や価格の不安定さなどの問題があり、それらが克服できたとしても、燃焼により温暖化ガスである二酸化炭素を発生し、地球環境に影響を与える。持続可能なエネルギー供給には、再生可能な資源を利用しなければならない。これらは、太陽エネルギー、地熱エネルギー、河川、潮汐などと、木材などバイオマスがある。バイオマスは薪、木炭として化石燃料の導入以前に用いられていた。燃料として使用すれば、二酸化炭素を発生するが、持続的に栽培すれば発生分を吸収するという循環が形成できる。バイオマスの利用は、薪やペレットのような固体、植物油などの液体、メタン発酵やガス化による気体での利用が可能である。固体は貯蔵や搬送が困難で、気体は体積が大きくなるので圧力容器に封入する必要がある、扱い易さは液体が一番である。

持続的なエネルギー供給においては、エネルギー利用効率を上げることと、使用量



「ひまわりプロジェクト」の様子

を減らすことが大切である。効率向上はそれぞれの機器開発において工学的に実施されているが、使用量の削減は使用者の意識に大きくかかっている。意識を向上させるには、実態を正確に知ることが大切で、間違った認識によりエネルギーが浪費される場合もある。現在、様々な媒体で意識向上の試みがなされているが、勝川商店街において、バイオマスエネルギーを通したエネルギー供給の理解のために、住民参加型の活動を行った。

前述したように、バイオマスエネルギーでは液体が最も扱い易い。主たるバイオマス液体燃料は、エタノールとディーゼル燃料があるが、エタノールは発酵・蒸留という生物・化学のプロセスが必要になる。ディーゼル燃料は植物油を変換するだけでよく、作成のプロセスを体験しやすい。そこで、ひまわり油によるバイオ燃料を、住民に栽培してもらい搾油しディーゼル発電で使用することを体験してもらった。

搾油に適したひまわりとして「春りん蔵」という品種を5月から勝川商店街で栽培してもらい、その種を収穫して搾油した。ひまわり油などの植物油はディーゼルエンジンの燃料とすることができる。搾油したそのままでも燃焼は可能であるが、粘性が大きいこと不純物を含むことから、実用においてはアルカリ触媒により改質して用いている。改質には苛性ソーダ、メチルアルコールなどの劇薬を使用するので、今回の実験においてはひまわり油を軽油に混合することでディーゼルエンジンで使用する。

ひまわりは商店街の軒先でプランターによって栽培されたが、露地と異なり花が小さく種も十分な油を含有するものとはならなかった。プランターで栽培する場合にどうしてもそのようになってしまう。2010年12月13日、勝川商店街弘法市において、住民と一緒に手動搾油機で種をつぶして油を採取した。収穫した種はプランター栽培に加えて、畑地で栽培されたものもあり、これからは搾油ができた。搾油を体験してもらうことも目的であるので、搾油効率が低いことは今回は容認している。約30ml程度の油が搾れたので、これに300ml程度の軽油を加えて、約9%のひまわり油を含むバイオ燃料を作成し、2KWのディーゼル発電機を運転した。このとき、手回し発電機を小型インバータを介して、白熱電球、LED球を点灯させる実験も合わせておこない、電気のできる仕組みを体験させた。

発電機はテレビと電球につなぎ、約3分間点灯させることができ、バイオ燃料の環境保全性、エネルギー利用の仕組みを理解してもらった。特に小学生の子供たちは、自ら参加し油を搾りテレビを見ることができ、楽しく学ぶことができたと考える。

〈「ひまわりプロジェクト」の経過〉

5月18日 午前10時に羽後ゼミの樋口と水野氏で勝川小学校訪問、小林三洋校長先生に、ひまわりプロジェクト協力を要請した。

6月14日 勝川小学校の朝の全校集会に参加、そこでこどもたちにひまわりプロジェク

トの目的と協力をお願いし、ひまわりプロジェクトのチラシを配布した。

6月19日 弘法市で水野氏と羽後ゼミ生たちでひまわりの種を配布した。

12月18日 弘法市において、搾油機を使い、商店街で回収したひまわりの種を絞る。山羽先生のミニ講義と指導で勝川小学校のこどもたちや地域の人たちが搾油を経験した。発電実験を行った。(樋口拓臣, 羽後ゼミ4年)

報告 3

アニメ・キャラクターによる商店街の活性化の基礎的条件 —町おこしの事例紹介を中心に—

川田 健 (愛知文教大学人文学部准教授)

筆者は勝川に居住しており、SNS愛っちを通じて知り合った水野隆氏のご紹介で地域コミュニティの勉強会である二水会に参加している。そこでは中部大学羽後ゼミの多文化交流を軸にした商店街支援の例などが紹介され、大変刺激を受けている。二水会では、町おこしは可能かどうかについて意見を求められた。本報告はそのときに述べたことを少し敷衍したものである。

一口に「アニメで町おこし」といってもさまざまなパターンがあるが、代表的なのは次の3つであろう。

- 1: アニメにその場所が描かれており、いわゆる「聖地巡礼」と称してファンが集まってくるパターン。もっとも有名なのは「おねがいティーチャー」(2002)の長野県木崎湖、「らきすた」の埼玉県鷲宮神社だろう。木崎湖の場合は場所が明言されており、放映当時から「巡礼」があった場所である。一方鷲宮神社の場合は、あくまで登場人物の実家の建物のモデルだったのだが、特定できるように描かれていたために評判になった。その後、商店街も積極的に訪問者(巡礼者という)を受け入れ、「らきすた」にちなんだグッズやメニューを設け、祭礼にもキャラクターが描かれた御輿が登場するようになったことは広く知られている。倉敷市では、同市出身の拓氏のコミック『めくりめくる』に連動させ「『めくりめくる倉敷』観光キャンペーン」を行っている。この作品は高校生の日常を切り取ったオムニバスで、倉敷市を舞台としている。これは上記の場合とは異なり、人気作品を借りるのではなく、今後の活躍が期待できる地元出身の作家の作品を起用したものである。
- 2: その場所とは関わらないが、人気作品のキャラクターをイメージキャラクターと

して起用して、知名度を上げようとするパターン。代表的なのは和歌山県西牟婁振興局が、2005年に熊野古道のPRのために人気ゲーム「CLANNAD」のキャラクターを起用、ホームページに登場させたり、ポスター配布会を現地で行ったりした。

- 3：自治体などがオリジナルキャラクターを作成するパターン。地元の名所のPRを目的としたキャラクターの例には、足利織姫神社、門田稲荷神社をPRする足利商工会議所「ひめたま」があり、名産品をPRする例としては、JA羽後が、あきたこまちのキャラクターに著名なイラストレーター西又葵を起用したものなどがあり、枚挙にいとまがない。東海地域では知多半島の「知多みるく」が有名である。「彼女」は若者の就活支援のキャラクターとして登場し、今では半島の観光PRの役割も与えられている。知多半島ではこのほか「阿久比ほたる」「武豊乙姫」などの、さらに地域を限定したキャラクターも登場させており、「知多ミルク」も総勢11人で地域を盛りあげている。

このほか、キャラクター制作者側から自治体に売り込まれた例もある。2003年に登場したびんちょうタンである。まだアニメで町おこしという考えがほとんどなかったときのことで、当時備長炭生産日本一の旧和歌山県南部川町の森林組合に持ち込んでキャラクターとして採用された。「びんちょうタン」はマンガとして連載されたほか、全12話のアニメも作成された。

もっとも大がかりな例は、「富山観光アニメプロジェクト」であろう。これは富山南砺市のアニメ制作会社 P.A.WORKS などが富山の観光資源を紹介するアニメを作成し、英、中、仏、韓各国語の字幕を付してウェブ配信を行う一方、富山テレビと業務提携関係にある、中国遼寧電視台の衛星チャンネルでも放送された。この事例は経済産業省発表の『「文化産業」立国に向けて ―文化産業を21世紀のリーディング産業に―』（2010年6月）にも紹介されている。

日本のマンガ、アニメの価値が広く認知されるようになると、自治体や団体がこれを活用しようとさまざまなキャラクターを登場させた。紹介した例はごく一部であり、現在はややキャラクター乱立状態になっているようにも思われる。単にキャラクターを作っただけではそれほど話題にもならず、空振りになる可能性が高い。ここで大切なことは、なぜ日本アニメ・マンガ文化が今日の地位を築いたかということである。台湾の社会学者陳仲偉の言葉を借りれば、日本のマンガ・アニメ文化は「ファンの文化」である。ファンは作品やキャラクターをファンのコミュニティなどを通じて自主的に発展させ、自分もその世界に深くコミットすることに魅力を感じている。つまりこれは「消費する文化」ではなく「参加する文化」なのである。町おこしを仕掛けるには、「どのように客を参加させるか」を明確にしておく必要がある。この条件を満

たすキーワードは2つあると思われる。1つストーリー、もう1つはコミュニケーションである。前者は、その場所に行くことによって、物語の世界を追体験できることを意味し、後者は、キャラクターが語りかけたり、二次創作をしたり、ファンコミュニティが形成されるなど、その物語やキャラクターが媒介となってコミュニティが形成されることを意味する。アニメ作品のように物語ができあがっていれば、追体験は容易であるが、それがなくても、キャラクターを作りこむ中で、「彼女(彼)」が商店街でどのような日常を送っているか、どういう仲間がいるかという設定が魅力あるものであれば、そのキャラクターがバーチャルアイドルのような性質を持ち、ファンコミュニティが形成される可能性はある。その例が前述の知多みるくであろう。詳細なプロフィールのみならず、ツイッターなどを通じてファンに継続的に語りかけるという努力をした結果、全国的にも知られる存在となっている。換言すれば、それくらいのもので作り込み、定期的にメンテナンスするという覚悟が必要であるともいえるのである。

報告 4

商店街におけるSNSネットワークとサイネージ構想案

上田敦彦（春日井SNS研究会代表）

商店街の機能は情報の交流である

商店街は、普通に商売をしていれば成り立つ時代は終わった。

価格競争の波に対抗しようとしても、大量仕入・販売の大規模店の前に小規模小売店は太刀打ちは出来ない。不思議なことに、その大量消費を仕掛ける大型店も実は利益確保にあえぐ奇妙な時代とも言える。これらは何を意味するのか、右肩上がりの成長が終焉を迎え、大量に売って利益を上げることが幸福だとする価値基準が崩壊しつつあることを証明しつつあるのだ。

元々商店街は物の売り買いだけで形成されていた場所だったのであろうか。中世の楽市楽座と呼ばれるころから、実は物と同時に大切に扱われていたものがもう一つあった。それは「情報」である。人々は、そこに集う事によって世の中の情報を知り、同じ地域に住む人同士を絆で結び、助け合いのコミュニティを形成していったのである。画一的で一方通行の物の売り買いが価値基準となった時代の方がはるかに短い期間であることを思えば、人間社会にとって人が集まる場所における普遍的な価値を見出すことは、すなわち本来のあるべき姿を思い出すことでしかない。

愛知県春日井市J R勝川駅という位置づけは、名古屋近郊の都市基盤として、通勤に極めて便利な位置という地の利を活かして、駅前再開発に伴ってコンパクトシ

ティが形成され、新規の住民流入が顕著なエリアである。ただ、そのまま手を打たねば、春日井市全体が名古屋のベッドタウンと称されるように、商業を始め、暮らしが名古屋に依存する形態に変わりはなく、人々が日々ただ駅前を通過をしていく街でしかない。

地域住民を商店街に引きつける魅力とはずばり、物の売り買いという側面だけでなく、この地域にとって必要な情報を得られ、人が集い、地域の絆が生まれ、次世代を育む環境を創造して行かねばならない。

まちづくり会議が導き出す一つの可能性の検証～SNSサイネージ

人が集まる魅力とはどんなものか、本会議では、こんなテーマでこれまで、様々な議論を通して、街の魅力づくりについて考えてきた。街が持つ魅力を探したり、他市の商業形態を研究したり、それらを踏まえた商店街の魅力づくりを行うために、何かを導入してみても？という検証をベースとして議論を重ねてきた。街にはハードに対してソフトが必要であるように、器には魂が必要です。歴史的背景や文化的財産をとりわけもたない普通の商店街だからこそ、小さな魅力を積み重ねて、ひとつひとつが小さい需要を掘り起こして行くことは、実は高齢化社会を目の当たりにして、独居世帯や孤独死といった、社会構造の疲弊に目を向ける結果にも連動していく。人と物を結びつけるのは、人の温かさであり、懐かしさであり、義理人情であり、時には近所のおじちゃん、おばちゃん的な、地域を見守る優しい目なのである。

そのためにまず着目したのが、縦糸と横糸を織りなすような手法の組み合わせが大切であるように、その横糸一つとして地域SNSを使った、21世紀に見合う情報の媒体を作ることと、それを使った人の絆の再生である。さらにその情報がデジタルデバイスと称されるような障壁で閉ざされることのないように、すべての老若男女に情報を優しく広めるための手法として着目されているのが、これから取り組むSNSをデータベースとしたSNSサイネージという手法である。

サイネージというのは、例えば駅の待合とか、証券会社のウィンドウとか、人通りの多い所に掲示される液晶テレビ画面を使った情報媒体のことである。これがSNSサイネージとなると何が違うのか。SNSとサイネージが融合するということは、市民が共有している情報を、パソコン・携帯を得意としない人たちにもテレビ画面を通して、情報を伝える手段を得るという意味をさしている。SNSは特定のメンバー間で情報の共有を図れるが、それをサイネージと組み合わせることで、情報を不特定多数の方にも発信を出来ることで、防災や防犯、暮らしの情報と言った公共性の高い情報をより多くの市民と共有する事が可能になり、身近な情報発信機能を地域が自ら持つことによって地域住民の距離が短くなり、絆の再生が期待できるのである。

SNSサイネージを映し出す液晶テレビは、例えば商店街の商店の店先に設置され

る。その情報を契機に、住民同士の情報共有が行われる。情報の受け入れと管理は、SNS（地域SNS）が受け持つことで、コストの低減と、地域に密接した情報のやり取りが実現できるのである。また、このSNSサイネージの特徴として世の中に普通に市販されている機器がそのまま使える点にある。つまり市販の液晶テレビにデータ配信の基点となるセットトップボックス（市販のパソコンと同等の製品）、データの配信は既存のインターネット、サーバは、これも既存のSNSが管理をする。という、特別な設備を用いないところに最大のメリットがある。

地域には、大手メディアがフォローしきれない、地域が必要とする情報が必ずあり、地域の中での情報共有が、隔絶された現代社会の問題に一筋の光明を与えるものである。この新しい取り組みに期待をするのは、情報の担い手がまた、地域の住民であることである。既存マスメディアでは手が回らなかった身近な情報発信に住民自らがディレクター役となって情報発信の担い手になることは、すなわち、地域が抱える問題に自ら手を伸ばすという行動につながり、地域の活性化が言葉通りに期待が出来る取り組みなのである。

コラム1

高齢者とITそしてNPO

今西 實（NPO法人けやきフォーラム理事長）

高齢者のIT化は2001年に始まった国民の3%にIT講習会を受講させようと自治省が提唱したことから始まった。

わが春日井市でも20歳以上の人約1万人に受講させようと、公民館、ふれあいセンター、学校、などで1講座20名12時間の単位で、講座の内容はワープロ初歩（文字入力）とインターネット検索とメールの受発信だったが、当時の受講者のほとんどが中高年齢者であった。

これら一連の講習会が終了したら国民のIT化が飛躍的に進行し、高齢者の生活の質の向上にも寄与することが期待された。しかし現実には期待した効果は得られなかった。

1年間のうちに一挙に講座を行ったために、12時間だけの受講に終わってしまい、フォローが全くされず、受講した高齢者には消化不良のまま終わってしまった。高齢者には根気良くフォローして学習の効果を高める必要があることを、なおざりにされてしまった結果、何の実りもなく、大騒ぎしたIT講習会は徒労に帰した感がある。

われわれNPOはそのフォローを続けて10年が経った。少しずつパソコンに興

味を持っている高齢者が増えつつあり、メールやネット検索ができる高齢者も多かった。

しかし、まだまだまちづくりや福祉活動の中心的高齢者がデジタルディバイドに埋没しているのが現状であり、ITがそのすべてを解決するとは思わないが、大きなブレーキになっているのも現実である。われわれNPOが世代の交代を確実に進めるための努力を更に積み重ねる必要を感じている。

コラム 2

まちに“書”が溢れていない“書のまち春日井”の不思議

波多野明翠（書家）

春日井市は小野道風生誕の地といわれているため書が盛んになるようにと“書のまち春日井”と言っている。しかし、そういう合言葉の“書のまち春日井”という書体が筆文字ではないということを以前から疑問に思っていた。春日井市に一步足を踏み入れたら筆文字で“書のまち春日井”と書かれ、街を歩けば“書”が溢れている街。それでこそ“書のまち春日井”ではないでしょうか？ 現在の書に関する取り組みといえば書の展覧会や揮毫大会。そして、一昨年から春日井まつりでは“Kasugai ザ 道風”なる催しが始まり、昨年の第2回目は春日井市内外の学生や社会人が書のパフォーマンスをメインステージで行った。これは別に目新しいことではなく、昔から書のパフォーマンスは書道家は行っており、今回のように音楽とあわせる大会というのは“書道パフォーマンス甲子園”の二番煎じとなる。今後はこの“書道パフォーマンス甲子園”との差別化を図り、春日井市独自のものとして、全国から出場者の応募があるような企画を練ることが今後の大きな課題であり、私自身も関わりたいと思っている。

全国規模の展覧会、書のパフォーマンス、これらは全国に発信する手段として必要なものではある。ただ、これだけでは自治体の自己満足に終わってしまう。街づくりと書とを結びつけてこそ“書のまち春日井”といえるのではないのでしょうか？ 街を歩けば“書”が溢れている春日井市。

そのためには市の施設は全て筆文字。そして市内の道標看板に路地の看板も全て筆文字。

また、店舗の看板についても筆文字を推奨し、モデル地域として筆文字以外の禁止区域があっても面白いのではないかと思う。街中が書であふれる本当の意味での「書のまち春日井」。これは決して遠い未来のことではないと信じている。

まとめ

羽後静子・岡本 肇

以上で取り上げた諸活動からは、二水会での対面コミュニケーションに支えられた「まちづくり」に、大まかに三つの問題領域があることが明らかになっているといえよう。

まず第一に、二水会で暗黙裡に確認されたことは、「まちづくり」には相互に働きかけあう二つの主体があり、その協力関係をつくりあげることが不可欠だということである。つまり、商店街を構成する商店の関係者と、商店街を訪れる訪問者たちと、どちらが欠けても商店街を再活性化する人間関係は生まれない。その意味で、一見無関係にも見える「まち歩き」と「ひまわりプロジェクト」とは、外から訪れる訪問者を商店街の当事者が案内することで、みなが町の情報を共有し、地域資源を再発見し、歴史的な遺産など商店街の隠された魅力を掘り起こすモデルケースの報告と、商店街の外の世界で訪問者たちも大事だと考えるであろう環境問題を商店街で取り上げる報告、さきにリサイクル・サミットに続いて、2010年度は特に「生物多様性」の維持に協力するために、商店街の各商店が自ら生物エネルギーを作る体験活動を一年間続けてきた事例の報告は、表面上は無関係にみえる。しかしながら「まちづくり」を外からの訪問者を迎えて知識を共有する側面と、商店街の各商店が外の世界での環境運動に参加する側面とで見事に「まちづくり」の一对のグッド・プラクティスになっているといえる。実は、勝川商店街の関係者はかねてから勝川の昔話を集めたり、昔からの勝川の歴史地理を研究してきた。その成果をまとめることで、訪問者を「まち歩き」に誘う事が提案され、早速実行に移された。環境問題を手掛かりにした勝川商店街の日本社会の広い世間への貢献は、今回の「ひまわりプロジェクト」に始まったわけではなく、勝川ではすでに2006年に「商店街リサイクル・サミット」を開催して、日本中の商店街の代表を集めた。今回は生物多様性条約締約国会議が名古屋で開催されたことをきっかけにした生物エネルギー活用を商店街の各商店の実践活動であった。このようにして、二水会での話し合いは、勝手な提案をしているのではなく、勝川駅前通り商店街の過去の経験を生かす形で、訪問者と商店主の両側をつなぐコミュニティの内外が呼応する体制づくりを進めようとしている。

第二に、商店街の「まちづくり」には、商店側と訪問客とが共通のイベントへの参加によってコミュニティ意識を盛り上げることが、「まちづくり」の大前提である。観光という演劇的な場面をつくる必要があるのである。勝川駅前通り商店街では、かねてから、その場として大弘法市を毎月の第3土曜日に開催しているが、この場を活用しながら、勝川商店街の特色として話題をよぶ独特のイベントを催す必要がある。その意味で、二水会で「書」と「アニメ」をとりあげるようなイベントの構想

が生まれているわけである。

ここでは、小野道風の生地である春日井市と、大弘法像を祭る勝川駅前通り商店街の「書」へのゆかりを生かそうという気持ちが、書家も参加している二水会で話題となったこと、「書」以外にも「アニメ」が世界的に日本の芸術として注目されていることへの二水会の会員の関心があらわれている。

第三に、「まちづくり」においては、リアルなコミュニティを再構築するために、インターネットを活用して、ヴァーチャルなコミュニティづくりを活用することが、二水会のなかで話題になった。すでにはじまっている高齢者にインターネットの技術を習得させることで、孤独感を克服するヴァーチャルな高齢者間のコミュニティをつくる二水会の一人の参加者の経験と、兵庫県で始まっているSNSを用いてヴァーチャル・コミュニティを作ること、参加者間のリアルなコミュニティを構築しようとしている例をとりいれて、春日井市を中心に愛知県のヴァーチャル・コミュニティづくりを狙う「愛っち」が二水会の他の参加者によって進められ、二水会もこれに参加し始めている。このように、勝川駅前通り商店街を中心とする春日井市の「まちづくり」を、商店街のリアルな範囲をはるかにこえるヴァーチャル・コミュニティ作りのなかに埋め込むかたちで、商店街とその訪問市民との参加するコミュニティ作りを進める社会実験が、二水会を中心にして進められている。

以上、商店街の内外の関係づくり、商店街の個性的な観光イベントの開催、ヴァーチャル・コミュニティのなかに商店街を埋め込む試み、この三つの側面で、勝川駅前通り商店街を中心とする「まちづくり」の実験が進んでいる。本稿は、二水会における、商店関係者とそのサポーターとの対話の中から自己組織系として次第に形をなし始めているソフトな「まちづくり」の実験に関する中間報告である。

注

- 1) 羽後静子「『神話の創造』による商店街の活性化と持続可能なまちづくり—春日井市勝川駅前通商店街の取り組みをモデルとして」(産業経済研究所紀要第20号 2010年3月 中部大学産業経済研究所参照)
- 2) 昨年度に続いて、フィリピン女性との協力活動について研究する。フィリピン女性が春日井市というローカルコミュニティで市民と共生するための協力活動には、彼女たちの自立活動に協力するために日本語・日本の風俗習慣について学習するリアルならびにヴァーチャルな場を提供することが不可欠で、このフィリピン女性コミュニティのニーズにどのように対応しているかについて、参加的な調査の手法をもって研究する。このことについては、2.で触れたSNSサイトを活用するほか、1.で説明した「二水会」において、フィリ

ピン女性たちとの協力についての中部大学学生による学習指導活動を勝川駅前商店街のまちづくり活動に関連付ける方策，たとえば大弘法市へのフィリピン女性と学生の協力のものとでの参加活動の可能性について協議し，必要に応じて支援している。

2011年1月に訪問したフィリピンマニラ市内にあるDAWNは，日本に出稼ぎに行ったフィリピン女性たちを帰国後に支援する団体である。多くの場合，フィリピン女性たちは，エンターテナーとして日本で働いている途中に日本人男性と出会い，結婚，妊娠，出産をした経験をもつ。しかし子供を産んでも日本人が認知しない，あるいは戸籍をいれないなど父親としての責任を果たさないケースが多い。DAWNは，このように日本人を父親にもち，フィリピン人を母親にもつ日比混血児たちにフィリピン語と日本語を教え，父親との再会をサポートしている団体である。子供たちは，日ごろは現地の学校に通っていて母国語としてタガログ語を勉強しており，週末に日本語の勉強にDAWNに通っている。母親たちは，自立のためのトレーニングを受けている。夫からの暴力によるメンタルケアから，機織りを習い，バッグやマフラーなどの制作など職業訓練を行っている。

二水会では，羽後ゼミの学生たちとも協力して，学生たちがフィリピンのDAWNを訪れた際，DAWNで販売しているインドネシアの布を10枚買い上げ，二水会共同代表の水野隆氏のレストラン『水徳』で実験的に販売している。

資 料 （平成21年度中部大学産業経済研究所研究発表会資料より）

「神話の創造」「新しい担い手」と商店街活性化に向けた持続可能なまちづくり

一春日井市勝川駅前通商店街の活動を事例として一



中部大学国際関係学部准教授 羽後 静子
春日井市商店街連合会副会長 水野 隆
中部大学中部高等学術研究所研究員 関本 肇

「神話の創造」と「まちづくり」

「商店街の歴史は作られる」→「神話の創造」

1 「神話」の二類型

- ① 創造型＝神々が世界を創造する。
(国生み神話、上からの計画)
- ② 進化型＝混沌の中から種々の実態が次々に生まれて、そこに宇宙が生まれる
(自己組織系、自律分散)
勝川の「神話」は進化型

2 「まちづくり」の二類型

- ① ハード型＝プランナーが箱ものを計画して、そこに人々が住みこむ「まちづくり」
- ② ソフト型＝混沌とした人々の付き合いの中で地域の価値・文化が次第に形成する「まちづくり」
勝川の「まちづくり」はソフト型

「新しい神話の創造」プロジェクト

「神話」「担い手」「まちづくり」の循環

- 「神話」 自然発生的(自律分散的)に生まれた「弘法市」とその裏の歴史
- 「担い手」 中部ESDまちづくり協議会
⇒(商店街+サポーター会)＝(二水会)
新しい担い手→新マンション住民、高蔵寺住民、外国籍市民、中部大生、
- 「まちづくり」活動 リサイクルサミット・多文化共生活動・さばてんプロジェクト・書道アーティスト

◎これからの中心市街地(商店街)の都市的な位置づけ

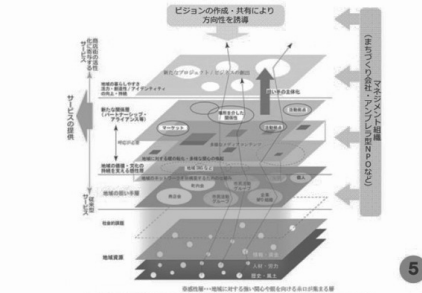
- ・地域アイデンティティを支える文化・交流・情報発信拠点
- ・高齢化社会を支える福祉拠点
- ・人口減少・低炭素化時代における集約型都市構造(コンパクトシティ)実現のための人口の受け皿 etc

ただ商品を売る場ではなく…、より公共的な位置づけに

◎中心市街地(商店街)における様々な「担い手」の必要性

- ・従来の「担い手」(商店会、町内会等の地縁コミュニティ)の限界
- ・NPO・市民活動、企業、大学等、様々な担い手の協働により多様なプロジェクトを通して総合的・持続的な運営をめざす
「パートナーシップのまちづくり・地域運営」が必要

中心市街市(商店街)活性化を支える「まちづくり体制」の発展プロセスイメージ



再 開 発 地 区



施 設 の 概 要

地 区	地区面積 (ha)	建築物概要 (㎡)		用途	備考
		建物面積	延べ面積		
833A* 勝川 (勝川駅北A2地区)	0.34	1,811	11,520	ホテル	事業完了
833A* 勝川 (松新地区)	1	約 6,830	約 34,950		
一帯街	0.3	約 1,300	約 9,820	商業・高層・住宅	事業完了
松新駐車場	0.5	約 1,830	約 9,190	商業・駐車場	
二帯街		約 1,430	約 7,950	商業・住宅	
三帯街	0.2	約 1,670	約 7,990	住宅	
勝川地区	1.8	約 6,880	約 39,730		
1街区-1		約 1,570	約 17,380	商業・住宅	
1街区-2	0.8	約 270	約 710	商業	
2街区	0.6	約 2,800	約 12,790	商業・住宅	
3街区	0.4	約 2,240	約 8,870	商業・駐車場	

再開発前の勝川駅前



勝川地区市街地再開発事業全景



事業の特徴

1. 土地区画整理事業と市街地再開発事業の同時施工
 1. 土地区画整理側で建物の移転(除去)が進められることから再開発事業としては事業費の削減につながった。
 2. 従前店舗で営業をしていた権利者の仮店舗の確保に関して、土地区画整理事業の施行当初に設置されていた仮設建物を再利用することが出来、権利者のスムーズな移転が可能になった。
 3. 土地の鑑定評価において、土地区画整理側で仮換地における評価が示されていたことから再開発の各筆評価については仮換地格差(比率)の考え方を尊重することで評価格差における理解が得られやすかった。
2. 再開発ビルをつなぐペDESTリアンデッキの活用

再開発ビルとJR中央線勝川駅をデッキでつなぎ歩行者による導線を確保できた
3. 公共施設整備

ペDESTリアンデッキへのアプローチとなる公共エレベータと階段が2街区南東角に整備された。

10

市街地再開発事業の課題

1. 事業の長期化
 1. 法定手続きや様々な関係機関との調整
 2. 権利者の資産保全を前提とした合意形成(関係権利者全員の同意)
勝川地区(権利者数 72名 土地所有者44名 関係権利者28名)
松新地区(権利者数 31名 土地所有者21名 関係権利者10名)
2. 総論賛成各論反対
 1. 事業主として権利者として相対する立場の中で生じる葛藤
 2. 自らの資産評価への思い、考え方、期待度の違い
3. 大規模建築物を計画せざるを得ない必然性
 1. 転出希望権利者の資産処分と事業資金回収のため余剰床(保留床)が必要→住宅デベロッパー(参加組合員)、駐車場会社へ売却(勝川地区)
4. 景気変動による影響
 1. 保留床処分やテナント誘致の目処が立てられないと事業進捗が鈍る
大型商業施設→学校法人→住宅
 2. 国や自治体の補助金額の変動で資金計画に狂いが生じる

11

市街地再開発事業がもたらした光と影

光

1. 居住人口の増加
2. 地域イメージ(ブランド力)の向上
3. ビジネスチャンスの増大

陰

1. 新旧住民との融和、地域コミュニティの崩壊
2. 昔ながらの空間の喪失(従来の街並みの整合性)
3. 街を維持するコストの増大

※地域に必要とされる商店街(地域密着型・時代対応型)の形成
→商店街の活性化の前に個店の活性化・ひとりごと

※新旧居住者との融和(多文化共生)→「壁」としての弘法市の継続と強化
→地域の団体・組織との連携(中部大学、NPO、地域SNSなど)

※安全で安心なまちづくりへの取り組み→犯罪の抑止力となる環境の整備
→BCPによる「死なないまちづくり」への取り組み

12



商店街+サポーター会議の様子

13

商店街+サポーター会議(毎月第二水曜日)

- 2009年度
- 2009年7月8日 水野隆 岡本肇
- 2009年8月4日 波多野明翠
- 2009年9月9日 出口美紀 今枝久
- 2009年10月14日 行本正雄 山羽基
- 2009年11月9日 村井亮治
- 2009年 12月
- 2010年 1月
- 2010年 2月
- 2010年 3月

14

かちがわ弘法市

- 毎月第三土曜日(年間12回)開催(商店街は歩行者天国)
午前10時～午後5時(夏期は夜間開催)
- アクセサリー、陶器、衣類、野菜、食品、飲食、大学ゼミ、NPO etc
約60～80ブース
- 毎回大道芸、音楽等のイベントを実施
- 年間約340万円の経費、出店料で約210万(平成19年度)
＜脱 補助金を目指している＞
- 出合い、ふれあいの「場」を提供(新旧住民との)
- 商店街は準備と片づけ(開催中は販売に専念)
- ボランティアの活用

提供:水野隆

15

勝川弘法市(毎月第3土曜日開催)の様子



16

